

「与えられた寿命を生きる」

辻 喜男

今年も誕生日を迎えました。気が付けば、すでに数年前から後期高齢者の仲間入りをしていました。地上の生涯が、あと何年残っているかはわかりませんが、全知全能の神を信じる者として、わからないことをあれこれ考えるのではなく、神が良い時に天に召してくださると、お任せすることにしています。

そこで聖書には人の寿命について、どのように記されているのかを調べてみました。

イスラエル人の歴史を記している旧約聖書によれば、紀元前の記録ですが驚くべきことに、その寿命は現代人とほとんど変わることがないということでした。私たちの寿命は長いか短いかに関わらず、神からの与えられたものであることを認め、受け入れることが求められているように思いました。

旧約聖書「詩篇」より

「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。そのほとんどは、労苦とわざわいです。瞬く間に時は過ぎ、私たちは飛び去ります。」

旧約聖書「イザヤ書」より

「そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命を全うしない老人もない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。」

ところで最近、面白い題名の本を見つけました。日野原重明・多湖輝共著「長生きすりゃいいってもんじゃない」(幻冬舎刊)です。日野原さんは106歳、多湖さんは91歳とお二人とも長寿でしたが、ここまで生かされてきた自分だけの人生を、一層深めながら人のため、世のためになる生き方を提案しています。

あらためて、自分の人生を神にお任せした者としては、寿命が長いか短いかではなく、死後のいのちまでも約束されていることを信じて、この地上に生かされている間、思い切り人のため、世のため、神のために生きることを願っています。